

小学生 特選

わる口のない世界を作りたい

東所沢小学校三年 齋藤 暁

ぼくはバレーボールをやっています。ある時、「なんでそんな女の子みたいなのスポーツをやっているの？」

と言われたことがありました。ぼくはバレーボールがなんで女の子のスポーツなんだと思いました。そして、男女さべつをするなんて、おかしいと感じました。

ほかにもユーチューブのまねをしてわる口をいつてくる人や、イヤなことをしてくる人もたくさんいました。ぼくは、いつもそれをどうかえていけばいいのだろうと思っていました。

そのとき、気がつきました。こまっているのはぼくだけじゃない。他にもわる口でイヤな思いをしている人たちはたくさんいます。ぼくはこの人たちの相談にのってあげようと思いました。

たしかに今でも相談できる場所があります。親や、学校の先生、学童の先生、ほけん室の先生やいろいろな人がこまっている人を助けてくれて

います。だけどぼくは一度も相談したことはありません。なぜだろうと思うと、それはこわかったからです。相談すると、わる口を言った子がもつとおこるだろうと思ったからです。

どうしたら気軽に相談できるだろうと考えました。ぼくはまずさいしょに大人から声をかければいいんじゃないかと思いました。こまっている子どもは自分から相談できないので、身近な大人が子どもたちに話しかけるべきだと思います。ただ大人がおかしい回答をしたら、子どもはかなしくなってしまう。たとえば、

「男なんだから野球とかサッカーをやりなよ。」
みたいなことを言われるといやな気持ちになっ
てしまいます。

そこで何をすればいいのだろうとぼくは考えました。大人が国語で正しい言葉づかいや言いかたを学び、道とくや社会でいろんな考え方を学ぶひつようがあると思います。そして、子どもたちにつたえていくことが大切です。

そのためにぼくはしょう来、小学校の先生になりたいと思います。つねに子どもたちの身近にいて、子どもたちを支え、自分から声がけできる先生を目指したい。わる口を言われている子の話をきくだけでなく、わる口を言う子たちの言葉も聞いて、やさしい言い方ができるように教えてあ

げたいです。そうやってみんながやさしい言葉を使えば、なかのいいクラスになります。イヤな言葉を使えば、言われた相手もイヤだし、言った方もイヤな気持ちになります。

そうやってぼくはみんなによい未来を教えてくださいたいと思っています。そうすれば、わる口のない世界がいつか実げんできると信じています。



未来から見た一九四五年八月五日

美原小学校六年 中澤 大智

今年の夏、僕は生まれて初めて広島県に行った。市内の少年野球選抜チームの一員として下関に遠征し、その帰りに寄ったのが広島だった。正直に言うと、下関遠征はとても悔しい思い出になった。大事な初戦、せっかく四番バッターで出場したにもかかわらず、普段はしないようなミスを連発してしまい途中交代になった。結局その試合に負け、目標だった優勝もなくなった。あの時もっと落ち着いてプレーをしていればと、今でも悔しい気持ちになる。そんな下関からの帰り道だったので、広島に着いた時の僕はあまり元気がなかった。

八月五日の朝、僕たちはホテルを出発して原爆ドームを訪れた。式典の前の日だったこともあり、平和記念公園にはたくさんの方が並べられていて多くの人が訪れていた。次に行ったのは原爆資料館だった。行きのバスで、資料館の中には見るのがつらい物もあると説明を受けていたので、少し覚悟をして行ったが、全身にやけどを負っている写真や体中に黒いはん点ができている写真、人間の骨が山のように積み重ねられている写真など、怖くて見る事ができないような写真がたくさんあった。後から聞いた話では、今の資料館はリニ

ューアルされて、怖い写真や展示物などはだいぶ減ったそうである。昔は今の三倍くらい怖さを感じられる場所だったらしいが、それでも僕には十分ショックを受ける場所だった。やはり戦争は絶対してはいけないと強く感じた。

資料館の最後に女の子の作文が飾られていた。書いていたのは僕と同じ小学生の子で、作文は一九四五年四月から八月までの物だった。四月に新しい友達ができたと、学校での行事や生活のことなど、僕たちが普段書く物と同じような日記だった。ただ、時々サイレンが鳴って防空ごうに入る生活は、今は全くちがうと思った。そして、日記は八月五日までで終わっていた。最後の日の日記は、それまでその子が上手にできなかった水泳ができるようになったことが書かれていた。だから八月五日の日記からは、ついに水泳ができるようになったうれしい気持ちが伝わってきた。日記の最後には、「今日はとても良い日でした」と書かれていた。次の日に悲劇が待っていることを知る僕は、その言葉がとても悲しく感じた。でも、その子にとって一九四五年八月五日はきつととても幸せな一日だったのだと思う。

僕が野球を上手になりたいと思うのも、普通は明日が来ると思っているからだと思う。来月になれば試合があり、いつかは夢の舞台で活躍できる

かもしれないと思っているから、努力することができるのだと思う。女の子もきつと、泳げるようになった姿をみんなに見せたり、友達と一緒に泳ぎに行くことを夢見ていたんじゃないだろうか。だから、がんばって水泳の練習をしたのだと思う。でも、女の子の夢が叶う日は来なかった。僕は今まで明日が来るのは当たり前だと思っていたが、女の子の日記を読んで、未来が来るのは決して当たり前のことではないのだと感じた。今も海の向こうの国では戦争が行われているし、大雨などの異常気象も人間が自然を大切にせず、自分たちの便利な生活ばかりを求めたからだと言われている。僕たちが自分の夢や目標を叶えるためには、まず平和に暮らせる未来を作っていくなければならない。人間は未来を知ることにはできないが、過去を見ることはできる。過去から学び、間違ったことは直していかなければ戦争で犠牲になった人たちに申し訳ないと思う。広島に着いた時の僕は、試合でのミスを悔やんで元気がなかった。でも、僕にはまだ努力して秋の大会でばん回するチャンスがある。それはとても幸せなことだと思う。そのことを忘れずに、自分の夢を叶えるため日々努力して毎日を過ごして行きたいと思う。そして、僕たちの夢が叶うよう、戦争のない平和で明るい未来になってほしいと思う。

私は四人の妹と一人の弟がいます。今回お母さんが出産したことで新しい命を生み出すことはとても命がけということを学びました。

五、六年生の保健の授業で女性の体のこと赤ちゃんが出来ることについて学び、その時ちようどお母さんが六人目を妊娠しました。その授業をきっかけでお母さんに私たちが生まれてきた時のことを聞いてみたところ六人全員安全ではなかったことを知りました。

私の時の出産は、胎盤が出てなくて院長先生のひじ上まで入り胎盤を除去したそうです。次女は陣痛促進剤を使ったけれど一日では生まれてこなくて二日かかったそうです。三女は

「経産婦なので早く産まれるね。」

と言われていたそうですが、病院に着いてから半日かかり、四女は促進剤が効きすぎて、分娩時間五十六分で生まれてきたそうです。その後、立ち上がった点滴棒をもって貧血で意識がなくなってしまうそうです。

そんなバタバタな出産げきだったので、五人目は出産をゆっくりあじわいたかったから無痛分娩を選択しました。金額は十万く十五万円かかっ

てしまうし、無痛分娩にも色々なリスクがあり、硬膜外麻酔を使っているので足感覚が鈍くなり立ち上がれないし、人によっては、頭痛や熱、かゆみなどがおこるそうです。私のお母さんはかゆみだけですんだので良かったなと思いました。

お母さんが六人目の妊娠が分かったころ、家族全員インフルエンザになってしまいました。看病をしていたお母さんにもうつてしまい、ひどい咳からお腹が圧迫され出血してしまい病院へ行ったら前置胎盤と発覚しました。私たち五人が生まれた産婦人科では対応しきれず、大きな病院へ一刻も早く転院することをすすめられたそうです。次の日大学病院を受診したところ、今すぐ入院は逃れられたけど、次出血したら即入院ということを告げられました。

それからお母さんを支える自宅安静生活が始まりました。お父さんと妹たちと役割分担をし、一人が仕事を忘れたらそれをカバーしなければいけない。自分たちの自由時間をけずり手伝いをしなきゃいけないのは、すごく負担がありました。みんなで協力してもすごく大変でした。お父さんは普段五時半に出勤していたのですが、お母さんが自宅安静になってから、私たちの水筒や幼稚園のお弁当を作り、幼稚園に妹を送ってから出勤する毎日を送っていました。

お腹の中の赤ちゃんが九ヶ月に入り、赤ちゃんが早産しても通っていた病院でみてもらえるくらいまで育ったころ、だんだんと私たちはお手伝いをおろそかにしてしまい、お母さんをいつものように動かせていた日が多くなってしまうました。そしてたらお母さんが二回目の警告出血を起こしてしまい即入院となってしまいました。

お母さんは病院へ行きすぐにみてもらったところ三十四週と六日だったので少しでも長くお腹で育てましようとなり、約二週間の入院予定でしたが、次の日また出血してしまい緊急帝王切開となりました。三十五週で生まれた弟は低体重児としてNICUで三週間入院していました。

私の弟はお母さんとお父さんの話を聞いていたかのように、お母さんの願いを叶えてくれました。予定日は六月中旬予定だったのですが、お母さんは

「五月中に産まれてくれるといいね。」

と言っていたこと、弟は小さかったので帝王切開の傷が小さくすんだこと、前置胎盤はハイリスク出産なので自己輸血を二回する予定でしたが自己輸血をする針はつまようじくらい太く、いつも弱音を吐かないお母さんが私たちに

「注射の針が太くて怖いな。」
と言っていました。でも自己輸血する日に出血し

自己輸血をまぬがれたそうです。そういったことから、弟の名前は願いを叶えてくれた流れ星から「琉星(りゅうせい)」と名前が付きしました。

今回のお母さんの妊娠・出産の経験で、命を産み出すことはとてもハイリスクであることがわかりました。日頃お母さんが行っている家事はとも大変なのに、お腹に赤ちゃんがいればもっと大変になることもわかりました。

今ここまで成長してこれたのは、お父さんお母さんが一日何回もオムツ替えや寝かしつけをしてくれていたんだと弟が生まれてきて、お手伝いのできるようになり、そう感じました。

今ある生活は当たり前ではないのでお父さんお母さんに感謝しながら毎日を大切に過ごしていきたいと思いました。十二歳離れている弟が増え八人家族になりました。私は大好きな家族とこれからもささいなことで笑い合い、たくさん思い出を増やしていきたいです。



小学生 金賞

ほ育園のお手伝いに行く

美原小学校四年 岡本 翠

私は、お母さんがほ育しをしているので、わたしから

「行ってみよう。」

とお母さんに言ってみたら

「きいてくるね。」

と言ってくれたので、返事がくるまで待っていました。

次の日にお母さんから

「来ていいよ、なんなら八回くらい来ていいよ。」
と言っていたとほうこくがありました。その時はうれしかったです。

はじめてほ育園に行く前の日は、ほ育園のルールやいろんなことを、教えてもらいました。朝は、六時三十分におきるときいてびっくりしました。おきる時間がいつもよりはやいからです。

ほ育園に行く日になって、電車で三十分乗ってつきました。初めてなのでお母さんについて行きました。

さいしょにはなしかけてくれた園の子は、二歳のNちゃんという女の子でした。Nちゃんとはばらくおままごとで遊んでいると、後ろからRくんという男の子の赤ちゃんが絵本をわたしてきたので、よんであげたら、にこにこしながら同じ本を何回もわたしてきました。そして、私のはなれと泣きだしてもどると泣きやんでくれるのでうれしくて、かわいいと思いました。

そのあとお昼ごはんの時間になって、わたしは年長さんのクラスで食べました。食べ終わると、たんにんの先生が

「お昼ねの前にこわい話をしてあげて。」

といわれたので、みんなにお話をしてあげました。しおわたたら、はくしゅや

「ちよつとこわかった。」

とこえがあつたのですが、はずかしかったです。あと少しうれしかったです。

みんながねてるあいだは、しゅくだいやせんたく物ほしやせんたく物たたみやプールのじゅんぴ、おもちゃふきやいろいろなことをしました。それを見てほ育園の仕事は、大変だなと思いました。

みんながおきたのは、三時でした。みんながおきたら、またお手伝いをしたりいろんな子とあそびました。四時三十分になるとかえる時間なので

家にかえって、お母さんとこの日のことをお話しました。

次に行ったときは、ほかのお手伝いの子が来ていました。その子の名前はEちゃんという女の子でした。

そして、ほかにもいろいろな子がきたいといっていたので一番多く（六回）行った私はもう満員で行けなくなってしまいました。私は、さい初悲しくてずっと泣いていました。だけとお母さんが「また次の夏休みになったら、たくさんきていいよ。だから、大じょう夫。」

とはげましてくれました。なので私は、また行くうと思っています。お母さんは、家ではおこたりのするのには育園では、おこらないでとてもやさしいです。できれば家でもやさしくたまにおこるくらいにしてほしいです。

一つ心配なことは、夏休みまでみんながおぼえていてくれるかがとてもふあんで心配です。だけど私は、あんなにたくさん行つてたくさん遊んでなかよくなったから、大じょう夫おぼえていてくれると信じたいと思っています。



ぼくのなかみはなにできてきているか

美原小学校四年 山縣 信仁

ぼくのなかみは、「負けずぎらい」でできている。ぼくは毎朝五時半に起きて六時から七時まで勉強していた。その甲斐あって、そろばんでは低学年表彰を受賞することができた。ぼくは自分が努力家だと思っていた。しかし僕よりもっとすごい友達がいた。彼は、毎朝四時に起きて四時から六時まで朝二時間勉強しているそう。その話を聞いたぼくは、次の日から朝五時に起きて五時半から七時まで勉強するようにした。毎朝三十分一週間で二百十分：一年間で百八十時間の差が出てしまう。僕は少しあせりを感じた。しかし父は「コツコツ努力し続けることができる信仁はすごいと思うよ。今頑張り続ける経験は大人になって必ず役に立つよ。」

と言ってくれた。ぼくはその父の言葉に勇気を貰い自分のペースを崩すことなく今なお頑張り続けることができている。

僕の中身を分解し続けてみると、弟に、「意地悪」をしてしまうそんな自分を見つけた。弟はいつもニコニコしていて家族も学校でも習い事でも、みんなの人気者だ。ぼくの友達も弟にすぐよくしてくれる。ぼくも弟のことが大好きだ。し

かし、弟はいつも勉強のじゃまばかりする。おもちゃのかたづけもしない。父と母にあまえてばかりだ。そんな弟を見ているとつい意地悪をしたくなる。力の加減がわからない僕はやりすぎてしまつてよく母におこられる。母に怒られると僕は悲しくなる。「意地悪」な自分は嫌いだ。意地悪な自分は二月の節分で自分の中身から消えてくれたらと思う。自分の中身の「意地悪鬼」を追いはらうことは今後の僕の課題だ。

僕の中身は色んな僕でできている。焼きもちを焼く自分もいる。今を作っているのは自分。先のこととは考えずにまず今の自分を受け入れることが大切だと思った。自分のことをちゃんと見つめる。なりたい自分になるとちよつとずつ違う自分の中身がふえていく。これから前向きに自分の中身を少しずつふやしていきたい。



つながる心

東所沢小学校四年 児玉 正太

ぼくには、二人のお姉ちゃんと、お父さんとお母さんがいます。みんなと一緒にカードゲームなどで遊んだり、おしゃべりしたりして仲がいいです。お姉ちゃんたちとたまにけんかしちゃうけど、一緒にいるととても楽しいです。

でもお父さんは、福岡にたんしんふにんしています。福岡には、約二年前から帰っています。さしよの方は、三年間福岡に行ったら帰ってくる予定だったけれど、今になってはいつ帰ってくるかわかりません。

お父さんが、たんしんふにん福岡に行く前は、いっぱいしゃべったり、一緒にねたり、お風呂に入ったりしていて、お父さんといろんなことができていました。だけど、たんしんふにん福岡に行ってから、だんだんそのようなことができる機会が少なくなっていました。

しかし、今はスマートフォンで会話できる時代です。ぼくは、お姉ちゃんやお母さんにスマートフォンをかしてもらって、お父さんと会話しています。例えば、ぼくが

「今日の夕ご飯は、ハヤシライスです。」
と送ると、お父さんは

「美味しそうですね。」「今日は鹿児島県のおくら島に行ってきました。」
などと送ってくれます。もちろん、会話はスマートフォンだけではありません。電話でも話しています。電話では、「みなさん元気ですか」「習い事はどうですか。」といった話しています。だけどやっぱ、一緒にいるときの方がたくさん話すことができます。会って遊ぶときにいなかったり、温せんにいけなくなったりすることが悲しいです。

でも、前と今とで変わらないものがあります。それは家族のきずなです。ぼくが今一番家族のきずなを感じているのは、お父さんから送られてきたときのお母さんやお姉ちゃんたちのはんのうです。さつき例にあげたように、お父さんは日常のことをたくさん教えてくれます。そうすると、みんなが

「ひまなんだね。」

とはんのうしています。ぼくは、これが、近くにいないくても、心は通じ合っているということだと思っています。なぜかという、なんとなく言っているものが本当にあたっているからです。

このようにぼくは、きずなとは近くにいないくても心が通じていることだと思っています。それだけでなく、言ったことや思ったことがだれかとかぶる、

いわゆるシンクロしていることだと思います。これからもぼくはこうした家族のきずなを守りつづけていきたいです。そして、ぼくがしょうらいだれかと家族になったときも、きずなを大事にしていきたいです。

私の大切な家族

東所沢小学校五年 本山 紗

「お母さん、がんばって！」

もうすぐ、妹がうまれる。私はこの日を、とても楽しみにしていました。お母さんとはビデオ通話をつないでいて、お父さんと三つ下の妹と一緒に、様子を見ていました。無つう分べんという、使いやすい使っていたみをやわらげる方法で出産をすることになっていましたが、とちゅうでますが弱まってしまつて、お母さんがとてもいたがつていました。こんなにいたがつているお母さんを見るのはじめてだったので、とてもビックリしたし、いつまで続くのか心配と不安になりました。すぐにますいを足してもらい、いたみはおさまったようでした。その後、無事に赤ちゃんが産まれました。とてもかわいい泣き声でした。

いよいよ退院の日、お父さんのアイデアで、あ

るサプライズを用意しました。それぞれがTシャツに絵をかいて、家族みんなでむかえに行くのです。お母さんはすごく笑ってよろこんでくれて、病院の受付の人や、先生たちも

「すごい」

「すてき」

と言って、拍手をしてくれました。サプライズは大成功でした。

赤ちゃんと一緒に家に帰り、初めてのだっこです。赤ちゃんはすごく小さくて、手足も骨みたいに細いです。でも、さわるとお肌がとってもフワフワでやわらかくて、ビックリしました。ミルクのにおいもして、一生かいていたくらい、幸せなにおいがしました。

そんな日から、一年三か月が経ちました。あんなに小さかった妹も、歩くようになり、少しだけしゃべるようになりました。いやなことがあると、ギャーギャー言ったり、あばれたり、正直言ってもかわいいただけではなくなりました。けれども、妹はとつてもかわいくてお世話をしていると、すごくいやされます。お父さんやお母さんが、妹をかわいがっている姿を見ると、私もきつと、赤ちゃんの時にこんな風にかわいがつてもらっていたんだろうなと思うようになりました。

私は、姉妹の中ではよく怒られる方です。怒ら

れた時は、お父さんやお母さんは、私のことがきらいなのかなと思ったりもしました。ですが、妹のお世話をしていくうちに、そんなことはないんだなと気付くことができました。

私は、家族が大好きです。これからも、家族を大切にしていきたいと思います。

キセキの出産

東所沢小学校六年 倉林 莉実

わたしには、去年の秋に産まれた妹がいます。産まれる予定だった約二ヶ月も前に産まれてきたのです。妹が産まれた日のことは今でもよく覚えていきます。とつ然、夜中お父さんに起こされて、お母さんが救急車で病院に運ばれると聞きました。お母さんを見ると具合が悪そうで、お腹を痛がっていてとても心配でした。お母さんに話しかけると、

「お腹が痛いからクツションを持ってきて。」

と言われたので、クツションを渡してあげました。すごく痛がっていて辛そうなお母さんの姿を見るのはかわいそうだし、不安でした。

救急隊の人たちが到着して、お母さんとお父さんが救急隊の人たちと話しているのを私は遠くから聞いていました。しばらくすると、お母さん

と離ればなれになってしまい、とても寂しくて泣いていたのを今でも覚えています。お母さんは運ばれたその日に、きん急の手術をして妹を出産しました。お母さんは『ヘルプ症候群』という病気になってしまったのです。

このヘルプ症候群という病気について私は調べてみたら、妊婦さんなら誰でもとつ然になることがあると書いてあり、最悪の場合は、お母さんの命も赤ちゃんの命も亡くなってしまう、とても恐ろしい病気だと知りました。実際に亡くなっている人もいます。その中でお母さんは、お母さんも赤ちゃんも生きていて、私はキセキだなと思いました。お母さんは病院で生きて良かったと看護師さんたちから言われたそうです。

「救急車を呼んでくれてありがとう。」

と先生からも言われたそうです。お母さんは助かって、赤ちゃんが死んでしまうとか、赤ちゃんが助かって、お母さんが死んでしまうとか、そういうこともあるみたいなので、二人とも無事に助かって本当に良かったです。もし、お母さんがしばらくお家で我慢をしていたら、救急車を呼ばなかったら、最悪の場合死んでしまっていたら、と考えるとすごくこわくて仕方ないです。

私は、命が産まれてくるというのは、当たり前のことではなく、とても大変で、とてもキセキ

小学生 銀賞

私の小さな弟

荒幡小学校三年 平松 怜

なことなのだと感じました。それと同時に命の大切さもすごく感じるようになりました。お母さんと妹のことを助けてくれた病院の先生たちや看護師さんたちには本当に感謝しています。妹は、一六〇〇グラムと小さく産まれてしまったので、しばらく入院していました。初めて会ったのは、産まれて二ヶ月もたつてからでした。それまでは、お母さんが面会の時に撮ってきてくれる、妹の写真や動画を見せてもらっていました。妹の写真や動画を見るのが楽しみでした。初めて抱っこができたときは、とつても嬉しかったです。とても小さくて、でもちゃんと生きていました。今ではお母さんも妹も元気に過ごしているのでもとても良かったです。あまり聞いたことがない病気だとは思いますが、「ヘルプ症候群」という恐ろしい病気があることをより多くの人に少しでも知ってくれたらなと思います。

改めて、元気で産まれてくるということは、とってもすてきなことなんだなと思いました。このことが起きて、より姉弟と仲よくしたいと思いました。



私には五歳年下の弟がいる。名前は京という。京ちゃんはいたずら好きで、目をはなしたすきにすぐにどこかに行き私たちを困らせる。この間スパーに行った時なんて、京ちゃんが始めた遊びに仕方なく付き合ってたあげたら、最終的に私がお母さんに怒られてしまった。夏休みはこんなことばかりだ。

でも京ちゃんにも良い所はある。いつも元気いっぱいで、まほうの笑顔を家族にふりまいてくれる。京ちゃんが笑うと家族みんなが笑う。三歳になつて着がえも一人でできるようになった。小さなせ中を丸めて毎朝一生けんめい着がえる。何度注意してもいつもズボンが後ろ前、くつが左右逆なのがとてもかわいい。

実は最近、少し困っていることがある。それは、いつもニコニコだった京ちゃんが近ごろ怒つてばかりいるのだ。前はクッキーを半分こすることや、京ちゃんが使つてなさそうなおもちゃを私が

使つても平気で許してくれたのに。今は、クッキーのかけら一つ食べただけで「キー」とサイレンのような声をあげて怒るようになり、おもちゃを借りたりしたらもう大変。

京ちゃん一体どうしたんだろう。ようち園でも同じことをしているの？ 気になってようち園の先生に聞いてみた。先生は、「ようち園ではいい子だよ」と言っていた。ようち園と家ではぜんぜんちがうみたい。なんで家ではそんなに怒つてばかりいるのだろう。

京ちゃんが怒るのはどんな時なのか、私は夏休み中じっくり観察してみることにした。すると一つ気付いたことがある。京ちゃんは家族に自分の思いが伝わらない時に怒りだすのだ。

お父さんが仕事で遊んでくれない時、お母さんが料理中でだっこしてくれない時、私が勉強中で絵本を読んであげられない時、京ちゃんは「キー」と怒りのサイレンをならす。

「うるさい！」

みんなに怒られると、京ちゃんは必ずこう言つてポロポロ泣く。

「パパ大好きなの！」

「ママ大好きなの！」

「ねね大好きなの！」

やっとわかった。京ちゃんのサイレンは「大好き」

のサインなんだ。

京ちゃんはきつと、ようち園では自分の思いが伝わらないことがあっても色々がまんしている。でも大好きな家の中では、大好きな家族にだけは自分の思いを伝えたいのだろう。そう思ったら急に京ちゃんをぎゅっとだきしめてあげたくなった。

私の小さな弟に伝えたい。私は怒っている京ちゃんも笑っている京ちゃんも大好きだよ。もうサイレンをならさなくていいんだよ。安心してね。私は京ちゃんのことを世界で一番大好きだから。

海でひろったなぞの物のしようにたい

美原小学校三年 竹内 結

わたしは、夏休み中にふくおかへ、旅行に行きました。その時に、長崎県のいき島へ行きまして。いき島の海で貝をひろっている時に、水のそこになにかがありました。さいしょは、「クラゲかな。」と思い、拾ってみました。その物は、かたく、びっくりしました。中を見てみると、貝ばしらのような物があったので、「これは貝だろう。」と思いました。おじいちゃんに聞いたら、「これは、何かの化石。」

と言ったので、わたしは、「何の化石かな。」「大昔の物かな。」と思い、とてもワクワクしました。ふくおかへ帰り、いここに聞いたたら、

「これ、貝じゃない。」

と言ったので、「いったいこれは何なんだろう」と思いました。おじいちゃんに

「どうやってしまったらいいの。」

と聞いたたら、

「こんぼうざいでつつんだり、ハンカチでくるんだりしたらいいけど、とにかくわれないようにしたらいいよ。」

と、言ったので、わたしは、ハンカチをつかって、やさしくわれないようにつつみました。

さい玉県へ帰り数日たち、わたしはお父さんと、図書館へあの拾った貝を調べに行きました。図書館には本がいっぱいありましたが、あの物がのっている本はありませんでした。ところが、もう一どよくしらべたら、あの貝のような物がのっている本が一さつみつかりました。その本は、小宮輝之さんが書いた「海のかくれんぼ」という本です。この本にのっていたあの物の名前は、「タコノマクラ」という名前で、どういう生物かというところ、「小石」をせなかにのせ、みをかくす。というところや、ウニのなかまなどと、タコノマクラだけではないけれどタコノマクラのじょうほうがあり、

それをまとめると、こうなりました。

タコノマクラは、あさいうみのいわば、すなや小石の海でいにすみ、小石をせなかにのせ、みをかくし、ウニのなかま、からのながさは十センチメートル。というのが、まとめたことです。

わたしがこのことを作文にした理由は、いき島で拾った物を調べたりしたことを作文にしたなら、おもしろいんじゃないかと思ったからです。

この人生の中で、どれだけの海の物をひろうのか、楽しみです。

しように来のゆめ

北中小学校三年 阿部 葵

わたしのしように来のゆめは、けいさつ官です。理由はみんなのいのちをすくってくれて、とてもかっこいいからです。

わたしがじっさいに会ってけいさつ官を見たのは、ぼうはん教室と小学校の通学路に立って、わたしたちを見まるところです。ぼうはん教室では、わるい人からみをまもる方ほうを教えてもらいました。通学路ではわたしたちが通る時に車をとめてくれて

「おはようございます。どうぞ。」

と言ってくれました。けいさつ官に会って、わた

したちをまもってくれてうれしい気持ちになりました。そのほか、テレビでさつ人・ごうとうなどのきょうあくはんざいをそうさしたり、えらい人をまもったり、地しんや土しやくずれなどのさいがいがあるとすぐに助けに行くところを見ました。はん人を見つけてたいほするのはむずかしいけれど、みんなできょう力してはん人をつかまえることがすごいなと思いました。地しんなどのさいがいがあった時にすぐに助けに行くことは、こわいけれど、ゆう気を持って行くことがすてきだなと思いました。

ほかにけいさつ官の仕事を調べました。落とし物を持ちぬしにかえず、ふりこめさをふせぐ、朝からパトロールをするなどはんざいのない町づくりをする仕事があります。みんなにけいさつ官のことを知ってもらうためにホームページやSNSでけいさつ官の一日などをのせています。また、けいさつ音楽たいが音楽会をひらいてみんなにえんそうをひろうしています。けいさつ官の仕事はわるい人をたいほすることだけではなく、ほかにもたくさんあるということがわかりました。わたしは、けいさつ官の仕事はみんなのいのちをすくうだけだと思っていましたが、もっとたくさんの仕事があつていそがしそうだなと思いました。とくにわたしは、小学校の通学路の道

路に立って小学生をまもる仕事がしてみたいなと思いました。理由は小学生のみんなと仲よくになれるからです。

けいさつ官になるには、小学生がやっているような紙テストに合かくしなければなりません。けいさつ官はわるい人をつかまえるために体力テストもあります。またけいさつ官にふさわしいか、面だんもあります。三つ全部に合かくできたらけいさつ官になれるそうです。紙テストに合かくするために、いまから学校やお家で国語や算数のべん強をがんばります。体力テストに合かくするために、外に出てたくさん運動をします。また体力をつけるためにのこさずごはんをたくさん食べます。わたしは、たまにねるのがおそくなるので毎日はやねはやおきをして、すいみん時間を長くとります。

わたしは、けいさつ官になったらどろぼうをたくさんつかまえたいです。また、小学生など子どもたちと仲をふかめてみんなを守りたいです。けいさつ官になるのはむずかしいけれど、がんばります。



わが家のリーダー

明峰小学校四年 迫本 碧桜

私は、父・母・双子の姉二人・弟・祖母・私の七人家族です。かく家族化・少子化が進んでいる今では、大家族だと思います。

父は、航空自衛隊のグッズをデザインし売っています。父は少し無口ではありますが、おだやかでやさしく、いつも私のわがママを聞いてくれます。双子の姉たちは、双子なのに全くにいていません。一人は絵がとても上手で私としゅ味がにいています。私はよく絵を教えてもらったり、遊んでもらいます。もう一人の姉はライバルのそんざいで、いつもけんかをしています。私が困った時、いつも親身になって心配してくれます。弟は、私の四つ下で、とてもあまえんぼうでおもしろいです。わがままなのでイライラすることもありますが、かわいいです。祖母は、私が生まれた時から、ずっと一しょに住んでいます。忙しい母に代わり、私たちの世話をしてくれます。習い事のおむかえや、ご飯を作ってくれて、とてもやさしいです。そして、私にとって最も大きなそんざいなのが母です。母は、病院のかんごしさんです。なので病気になった時は一番たよれます。母は休みの日

にそうじをします。母は働き者です。最近母は、夜きんをするようになり、夜仕事でいないと、とてもさみしいです。それでも、家族が多いので、みんなですごし、そのさびしさを弟や姉たちと共感しながら、まぎらわすようにしています。家族の中で、母が一番ホツとします。

私は小学校に入学した時、小学校というかんきように、なかなかじめませんでした。学校がいやなわけではありませんでしたが、それでも自分たち子供だけで登校することが心細く、不安でした。そんな私に、母は安心して登校できるよう毎朝つきそってくれました。朝学校に向かう母との時間が、自分の中で、学校でがんばろうと思う切りかえの時間になりました。母がどうしてもつきそえない時は、母に代わり父がつきそってくれたこともありました。そんな日が十二月まで続きました。母が一しよにいてくれたことでじよじよに学校にもなれることができました。

そして、私が一番しんばいだった出来事がコロナが流行した時のことでした。私たちはきん急事たいせん言により、自たく待きとなりました。いつだれがどこでコロナに感せんするのかわからず、不安な日々が続きました。私が最も気がかりだったのは、かんごしの母でした。私たちは感せ

んしないために家ですごすことができたが、母はしよく場へ行き、コロナと戦わなくてはなりませんでした。母が感せんしたらどうしようかと不安でしかたありませんでした。そんなコロナのもんもんとした生活の中、母は少しでも私たちが楽しくすごせるよう、お休みの日には、家の中でできる遊びをたくさん考えてくれました。いちごがりやプラレール回転ずし、えん日ごっこやお庭でピクニックなど、父と共に計画してくれました。母はしよく場で、せい心的にも肉体的にも大変だったと思います。私たちのために楽しい思い出を作ってくれました。

今はコロナも五類となり、マスクをつけなくても良い生活にもどり、安心してすごせるようになりました。やつとほつとした矢先、母にい変が起きました。いつも明るく元気な母が、じよじよにやせていきました。仕事から帰たくして横になるすがたが見られるようになり元気のない日がふえてきました。そんな日が数ヶ月続いたある日、母がこうじようせんの病気であることが分かりました。私にとっていつも明るいわが家のリーダーである母が病気をするとはゆめにも思いませんでした。とても心配でした。薬のおかげで、前のように活気もどってきた母ですが、少しでも

母の負たんを軽くしてあげたいと、私はお手伝いをがんばることにしています。そして少しでもよろこんでもらえるよう、今まで苦手だったことにもちよう戦するようになりました。

今は小さなことしかできませんが、もつと母と父の力になれたらいいなと思っています。そして、しろう来大きくなつた時に、私がしてもらつたことを自分の子供にもしてあげたいと思います。

人を助ける仕事につきたい

東所沢小学校四年 小林 葉央

わたしのしろう来のゆめはお医者さんになることです。

わたしが年中のときのお正月におばあちゃんの家に遊びに行きました。朝起きたら、高い熱がでていました。わたしはおぼえていませんが、病院を探するのが大変だったとお母さんが言っていました。病院では先生が、コロナかインフルエンザのけんさをしてくれました。けんさでは、めんぼうみたいなのを鼻に入れました。

「いやだ！ いたい！」

と思いました。先生は、

「がんばったね。」

と声をかけてくれました。薬を何日か飲んでよく

なりました。お医者さんは熱をなおしたのがすごい、わたしも人を助ける仕事がしたいと思うようになりました。

今がんばっていることは三つあります。一つ目は学校の宿題です。二つ目は国語、算数の習い事です。三つ目はピアノです。

一つ目の学校の宿題についてです。わたしは、学校が終わったら学童に行きます。学童にうちに宿題を終わらせています。宿題をやるのをわすれたことは一度もありません。

二つ目は、国語と算数の習い事についてです。この習い事は、宿題が多くですが、がんばって全て終わらせています。今自分にできることをこつこつとやっています。

三つ目のピアノについてです。わたしは四歳のころからピアノを習っています。保育園のころはお母さんに言われてイヤイヤ練習しました。小学校に入学してからは、自分でピアノのがくふを読んで、一人で練習するようになりました。ピアノのレッスンは週に一回ですが、なるべく毎日ひくようにしています。毎日、朝からピアノをひくのは大変ですが、なんとかがんばっています。毎日のがんばりのけっか、去年の音楽会のばんそうに選ばれました。毎日一つのことをがんばるのは大変ですが、どりよくすることは大切だと思います。

自分の家の近くにわたしがいつもぐあいが悪くなると行く病院があります。その病院の先生は女の先生で、やさしい先生です。熱が出てないとき、例えば、アレルギーのけんさなどで行ったときにはやさしく説明してくれます。わたしは、その先生を見て、わたしもこんなやさしいお医者さんになりたいと思っています。

どうしたら医者になれるか調べてみました。大医学部や医科大学で六年間の医学部教育を受けて国家試験に合格しないといけません。医者になるにはたくさん勉強しないといけないと聞きます。かんごしさんやじよさんしさんでもいいんじゃないと家族に言われることもあります。う言われてもやっぱり医者になりたいと思います。

医者になるにはたくさん勉強をして大学に入れたとしても、日々、研究され進歩しているので、勉強しつづけないけません。かんじやさんに思いやりをもった医者になれるように、自分ができることをよく考えて生活していこうと思います。



本から学んだ将来の夢と友情関係

並木小学校五年 竹前 日菜子

わたしは、将来の夢のつけ方が分からず困っていました。

「成瀬は天下を取りに行く」、「成瀬は信じた道をいく」に出てくる成瀬という人物のセリフの中で、

「先のことはわからないからなんとも言えないが…。何になるかより、何をやるかのほうが大事だと思っている」

という言葉におどろきました。例えば、成瀬はパトロールをしています。警察官にはなりたくないそうです。今までは何になるかばかり考えていました。好きなことから将来の夢を見つけていくことが大切だということに気がきました。

成瀬はお笑いの頂点を目指そうとしたり、紅白歌合戦に出場したりするなど、むずかしいことでも構わず進んでいきます。成瀬は、立てた目標のどれかが実現したいと思っています。私は、やったことのすべてを成功させた方がいいと思っています。成功させるよりチャレンジすることが大切だと気がきました。

成瀬の言葉の中には、

「わたしが思うに、これまで二百歳まで生きた人

がないのは、ほとんどの人が二百歳まで生きようと思っていないからだと思うんだ」という言葉があります。確かに、わたしも二百歳まで生きようと思ったことはありませんでした。しかし、できないかもしれないような大きな目標を立て、それに向かって全力で進むことが大切であり、それが将来の夢につながっていく可能性があるかもしれないと思いました。

そこで、わたしもできる限りのことにチャレンジしてみることにしました。例えば、お店の人に声をかけようと思いました。わたしは人に声をかけるのが苦手で、声をかけられませんでした。しかし、まずはお姉ちゃんと一緒に声をかけてみて、チャレンジできたなと思いました。次は一人で声をかけられるようになりました。そしてこれからも、小さなことからチャレンジしていきたいと思っています。

「成瀬は天下を取りに行く」、「成瀬は信じた道をいく」には、島崎という成瀬の幼なじみが登場します。どんどん進んでいく成瀬と、そんな成瀬についていく島崎との関係がすてきだと思いました。成瀬がやりたいことに進んでいけるのは、かなえられないくらい大きな目標を何個も持つ成瀬を認めてくれる島崎の存在があったからこそなのかもしれません。



これからは、自分のできることだけを確実にするのではなく、できないこと、苦手なことにもチャレンジしていくことが大切だと考えました。また、チャレンジしたことが、将来の夢につながる「好きなこと」になるかもしれないと考えました。そして、将来の夢は、これから増えるであろう、「好きなこと」から発展させていくことにしました。

そうやって未来の自分のことを考えていると、少し楽しくなりました。

最高の思い出 サマースクール

東所沢小学校五年 神谷 日咲

私はこの夏、一週間の所沢サマースクールに参加しました。サマースクールは今年で四十一年目で、抽選で当たった、百人ほどいる所沢市の小学生の他、中学生や高校生、大学生や大人のリーダー四十人ほどが私たちを支えてくれます。私の姉も昨年行っていて、とても楽しかったということで私も今年応募しました。毎日沢山のプログラムがあり、自分がやりたいことを選んで遊ぶことができます。ふだんの生活ではあまりやらないようなことを体験できたので、楽しい一週間をすごすことができました。

出発前には、今まですごしてきた家族と一週間はなれることの悲しさとさみしさで泣いてしまいました。ですが、バスに乗った時に、となりの席だった同じ班の子が話しかけてくれたのです。その時は本当にうれしかったです。

私たちが一週間すごす所は、栃木県にある「星ふる学校くまの木」といい、元学校で、現在は廃校になっている木造一階建ての周りを田んぼに囲まれた校舎でした。どこかなつかしいような気がして、これからここで一週間すごすんだ、とてもわくわくしました。

最初は、これからどうなるのか不安だったけれど、一日目の終わりに近づくとは班のほとんどの子と打ちとけることができたので、不安よりも、このあととはどんなことをするのだろう、というワクワクした気持ちの方が大きくなっていました。

私が選んだプログラムの中でも、川とカレー作りが特に印象に残っています。山も行きなかったけれど、二回とも雨で中止になってしまったので本当に残念です。

川では、ライフジャケットやうき輪を使ってぶかぶかういて遊んだり、たきびでマシマロを焼いて食べたりしました。水は冷たかったけれど、大勢で遊んでいたのも、とっても楽しかったです。近くでは、魚釣りをしている友達もいたので、私も次は挑戦してみようかな、と思いました。

カレー作りでは、じゃがいも、にんじん、玉ねぎを調理する当番に分かれて、料理を作りました。私はじゃがいもを切る当番だったのですが、近くに玉ねぎを切っているグループがいたので、

「じゃがいもを切っているのになみだが出るなんて、何か不思議だね。」

と、同じ当番の人たちと笑いました。私たちが作ったカレーと、はなごう当番の人たちが作ったお米を使ったカレーライスをみんなで食べた時は、今までで一番美味しく感じました。

他にも、校庭遊びや、体育館遊び、光るビー玉作り、思い出のアルバム作り、テントや体育館にお布団をしいてねるなどの沢山の体験をしました。また、夜には、肝試しやキャンプファイヤーなどもしました。

肝試しでは、小学生がランダムによび出され、男女五、六人がグループになって夜の学校の廊下を進んで行きます。自分の名前が呼ばれた時、ものすごく緊張しました。急に出てくるおばけや追いかけてくるゆうれいなどがこわくて、さびびながら進みました。私にとって人生初の肝試しで、とっても怖かったけどその分とっても楽しかったのも、来年も楽しみにしています。

キャンプファイヤーは、雨の中行いました。びしょびしょになりながらもみんなでラジオ体操の踊りや、ゲーム、あんたがたどこさなどをして、配られたアイスを食べたりして楽しい時間をすごしました。四十一年間で初めての雨のキャンプファイヤーだったらしく、親がいたら、かぜを引くからやめておきなさいと言われそうな雨の中での貴重なキャンプファイヤーを体験できたので、とてもうれしいです。

出発前になると、行きとは反対に、一週間すごしてきたくまの木からはなれることが、すごくさみしくて、これで本当に終わってしまうんだと悲

しく思いました。

所沢市に近づくにつれて、まだ帰りたくない、友達やリーダーと別れたくない、という気持ちが増えていきました。しかし、

「大丈夫だよ。またいつだって会えるよ。」

という友達の声聞いてうれしくなりました。その子たちのおかげで私は悲しい気持ちよりも、うれしい、楽しい気持ちでみんなと別れることができました。

私は、サマースクールのおかげで虫に強くなりました。また、前よりもがまんすることができるようになりました。一週間の中で、自分の気持ちをおさえなくてはいけないこともあったからだと思います。

本当に、このサマースクールでは大切なことをいくつも教わりました。この夏の一週間は、私にとってかけがえのない思い出です。来年も絶対に行きたいです。



中学生 特選

僕にとつてのボランティア

安松中学校一年 三浦 拓也

僕は、夏季休業期間中の四日間に社会貢献の一環として、所沢市教育委員会が主催するボランティアに参加しました。

僕が参加した「トコろん算数のびのび塾」とは、地域の教育力を活かして、市内の子供たちの学力向上及び学習意欲の向上を図るためのプロジェクトです。より学習を充実させるために、九九マスターコースと計算力アップコースの二つのコースが設けられていました。その中でも、僕は前者の九九マスターコースを担当しました。

今回のボランティアを選んだきっかけとして、小学一年生のときの先生が導入した算数の授業方法が挙げられます。

その先生は、小学校に入学して間もない頃から、授業内で学び合いを取り入れていました。プリントや課題が終わり、先生から合格をもらった生徒は、まだ理解できていない他の生徒に「ミニ先生」として問題の解き方などを教え、サポートをしま

す。サポートされた生徒は、次第に理解が深まり、別の生徒に教えるにいきます。最終的には、クラス全員が「ミニ先生」になりました。

この経験は、得意なことは自分だけでとどめず、教え合うことで、みんなで達成することの嬉しさを感じることでできました。今でも、グループワーク活動などに、活かしています。

ボランティアの定義を調べてみると、自主性、社会性、無償性などを含む自発的な意志に基づき、他人や社会に貢献する行為を指していることがわかりました。僕がボランティアの定義の中で特に意識したことは、自ら取り組む姿勢を示す、自主性でした。

今回のボランティアを通して学んだことは、大きく分けて二つあります。

一つ目は、生徒一人ひとりのペースを変えずに、学習を進めることの大切さです。初日は、担当した全員に同じ目標を掲げ、取り組んでももらいました。しかし、終了時には経過具合に大きな差があらわれました。僕は、全員が一律ではなく、個人ごとに自分に合ったペースがあることに気が付きました。これらを踏まえて、二日目以降は一人ひとりの中でベストを尽くすことを促進しました。具体的には、生徒本人とその日に取り組むプリントの枚数やスピードなどを相談し、自主的

な学習を進めました。その結果、子供たちから、「計算がこれまでより早くなった。」という声がありました。

二つ目は、僕を含めた中学生、高校生、大学生、OB教職員や教育委員会の方々など、幅広い世代の人たちが関わる場となったことです。例えば、OB教職員の方からのアドバイスとして、「集中して取り組んでいるね。」

「あと少しだから頑張ろう。」などの前向きで、子供たちのやる気を高める声掛けを学びました。

これらの二つのことは、日常生活にも反映することができると、今回のボランティアだけで止めずに、僕自身の学校生活にも活用していきたいです。

また、僕は今年度から所沢市青少年育成推進員協議会のジュニア推進員に加入しています。ジュニア推進員の活動では、青少年健全育成を図るため、各地域での地区内の小中学校の見守り活動、非行防止パトロールを行います。今回の「トコろん算数のびのび塾」の経験を活かし、地域の活性化に貢献していきたいと思っています。



この小さな手でできること

北野中学校一年 安部 希香

私は六歳の頃から所沢市内の合唱団に入って活動をしています。歌う事が大好きな私は、耳をすましてよく聴き、みんなで呼吸をそろえ、声を合わせ、気持ちを合わせて歌う、そんな合唱の練習の時間がとても心地よく、幸せな時間です。

学年が上がるにつれ、合唱に対する気落ちも変わりました。上手に歌うだけではなく、私たちの想いを伝えたい、聴いて下さる方が、その時だけでも笑顔になれる時間になって欲しい、という思いが強くなりました。それは、「音楽は人の心を動かす力がある」ということを合唱を通して確信したからです。

昨年、ハンガリーで行われた「二〇二三国際青少年音楽祭」というイベントに私たちの合唱団が日本代表として招待されました。私は初めて十日間のホームステイを経験しながら、そのイベントに参加しました。イベントでは、日本語、英語、ハンガリー語の曲を十曲ほど歌いました。

一番心に残っていることは、色々な国の方々が私たちの日本の歌を、歌詞もわからないのに真剣に聴き、そのリズムに合わせて手拍子をしてくれ、時に涙を流しながら聴いて下さったことです。

特に、平和を願う「地球星歌」という曲は、私も歌っていると思わず涙が溢れる曲ですが、この曲を聴きながら私と同じ様に観客の方々が涙を流す姿がありました。

歌い終わると、スタンディングオベーションがなかなか鳴り止みませんでした。私たちの歌に込めた想いが大勢の観客の心を動かし、会場全体が一つに繋がった光景を目にして、とても感動しました。

日本から八千九百二十四キロ離れたハンガリーは、ドバイで乗り継ぎ二十二時間かかりました。自然豊かで、お城の様な素敵な建物が建ち並び、日本とはまた違う景色でした。言語こそ通じませんでした。日本から持参した紙風船や折り紙をホストファミリーの子どもたちに渡すと、すぐに遊び始め、打ちとけることができました。遠く離れた国であっても同じ地球で暮らす私と同じ世代、同じ感性を持つ、なんら変わりのない仲間なのだなと思いました。

その一方でハンガリーの隣国には、今もまだ戦争をしているウクライナがあります。二〇二二年二月から始まったウクライナ戦争は、今までに五十万人もの方々が亡くなりました。学校や病院に爆弾が投下されたというニュースを聞く度に、私は心が張り裂けそう、とても悲しい気持ちになりました。

ります。

私が過ごしたハンガリーでの素敵な時間の間も、戦争が続いていました。こんなに静かで、穏やかな時間が流れている隣の国で戦争が起きているという現実はとても信じられませんでした。そして大好きな家族と一緒にいられること、毎日学校に通えること、好きな事に全力を注げること、今まで当たり前の様にしてきたことが、それは決して当たり前ではないということを実感しました。だからこそ、感謝の気持ちを忘れず一日を大切に過ごさなければならぬのだと思いました。

地球星歌の歌詞の中に「この小さな手で、できること」とあります。この歌を歌う度に、十三歳の私に今何ができるのだろう、と考える様になりました。でもそれは、平和への願いを歌に込めて歌い続けることだと思えます。ハンガリーで確信した、「音楽は人の心を動かす力がある」という思いを胸に、この先も日本だけではなく、沢山の国で歌い、平和への願いを一人でも多くの人に届けられる様に頑張りたいです。



幼稚園の頃、大工になりたかった。トンカチやノコギリを自由自在に操って家を建てている自分を描いた絵が、卒園アルバムの表紙を誇らしげに飾っている。

どうして大工になりたいと思ったのか。おそらく、季節ごとのイベントで様々な大道具、小道具を手作りしているうちに、ものづくりの面白さに目覚めたからだ。たくさんの廃材や雑紙の山を、お菓子の家やお化け屋敷に仕立て上げるのは確かに夢があった。どんなに奇妙な色合いになっても形がいびつでも「自分たちが作った！」と大満足していた。先生も保護者も満面の笑みで誉め称えてくれた。

ものづくりは楽しい。誉められることは嬉しい。友達と協力して何かをやりとげるとは、大変だけれど楽しくて嬉しい。

そういう幸せな体験を経て「将来の夢」を描くことになった時に、ものづくりができて皆を喜ばせる仕事として、大工を思いついたのだろう。

小学校に上がってから将来の夢はよく尋ねられた。総合の時間の活動として「働く」ことについて考える機会が増えたとし、親族からも挨拶が

わりに聞かれる。そのたびに「まだ何も決めていない」とごまかしたり、自分の描きたい絵を描くことは好きだったから「漫画家」と言ってみたりした。卒業文集には「画家」と書いている。

しかし、中学生になると「働く」場所に実際に踏み込む職場体験が加わり、将来の職業選択が俄然、現実味を帯びてきた。体験先を決め、下調べをし、先方と打ち合わせをする。授業や部活、そして目の前の宿題を終わらせることだけであたふたしている毎日だというのに、遠い将来のことまで考えると言われても、不安が先に来ってしまう。

そんな中で参加した職場体験は、学校では絶対に味わえない緊張感で身の引き締まる思いだった。中学校を卒業したら大多数は上級学校に進むとはいえ、就職する選択肢も確かにあるのだから、働くことの欠片にでも早いうちに触れておくことは有意義に違いない。

考えてみれば、自宅を出て電車に乗って塾に行くこうとするだけでも、世の中は働く人でいっぱいだとわかる。住まいの管理人、道路清掃員、電車の運転手、交番、飲食店、塾の先生などなど。すれ違う人々だって、きつと何かの仕事をしている。「自分にあの仕事ができるかな？」と想像してみる。仮にコンビニの店員さんを観察すると、レジ、品出し、店内の清掃など常に忙しんでいる。レ

ジもただ品物の値段を打つだけではなく、公共料金の支払いや宅配便の受付など、たくさんの業務をこなしている。大変すぎる！とたじろいでしまうほどだ。

両親に昔なりたかった職業を聞いてみた。父は、国家公務員になることは大学一年生の時から決めていたそう。そして三年後、実際にそうなるから二十数年間、今も働き続けている。母は医師やスチュワーデス(今ではCA)など色々夢見ていたが、結局入る学校に入って卒業し、約十年間事務職をした後に主婦である。会社員だった当時、あまりに知識不足で、学生時代にもっと勉強していれば良かったとつくづく思ったそう。

「正義は今からなら何にでもなれるはずだよ」と両親は言ってくれる。「将来のことは自分で選び取るしかない。でも幸せになってほしい。結局それより大事なことはない」とも。大工になりたかった気持ちは遠いものになっているのに、働くとはどういうことかと改めて考えてみると、あの純粋な憧れを思い出す。そして必然、現在の自分が出来ること、出来ないことと相対せざるを得ないのだ。

まずは基本的な知識を身につけて、今しかできない体験をして視野を広げたい。この夏休み、汗だくになりながら上級学校訪問をしていると、確

中学生 金賞

かに気になる学校や学科はあった。未だまっさらな中学校の卒業文集には、将来の夢を何と書くことになるだろうか。

「トころん算数のびのび塾」に参加してみて

北野中学校一年 大舘 侑真

僕は、所沢市教育委員会主催の、算数基礎学力向上プロジェクト「トころんのびのび塾」ボランティアに参加しました。

動機は、僕が算数が好きなことと、小学校卒業時のクラスメートからのメッセージに、

「算数を教えてくれてありがとう」

と何人かの友達を書いてくれてとても嬉しかったからです。ボランティア経験は初めてですが、算数を教えることで喜んでもらえたらと思い、参加してみることにしました。

二日間の担当で、開催場所は、教育センターに決まりました。教える児童の学年は、小学校三年生から六年生のうち、両日共に四年生で、四則計算を教えることになりました。

まず最初に説明会があり、先に記した通り、ボランティアが初めてなので、説明をしつかりと聞くように心がけました。その後、自己紹介があると聞き、とてもドキドキしました。また、北野中学校からのボランティア参加者が僕しかいなかったことと、中学一年生での参加が、この日は僕一人だったようで更に緊張しましたが、班分けした六人の中の自己紹介となり少しほっとして、自分の名前を紹介することができました。

トころん先生の心構えとして、小学生へは、『どうやって教えたならもっと分かってもらえるか工夫しながらアドバイスをお願いします』とあり、それを心がけてトころん先生（ボランティアに参加した人のこと）がスタートしました。

自分の班にいた四年生四人は、全員一日目にも参加していたらしく、四則計算のうち足し算と引き算は終わっていました。自分にはとても簡単に思える問題も丁寧に教えることができました。かけ算わり算の虫くい算が難しく、立ち止まってしまう児童もいましたが、皆楽しく問題を解いていました。

教え方で大変だったのが、四年生はまだ習っていない少数のかけ算にとまどってしまっていたことです。自分は簡単に解けても、四年生には難しい計算方法をどうやって教えたらいのか指

導の難しさを感じました。説明が分かりにくかったのか、説得力が無かったのか指導の仕方に悩み、同じ班の上級生に手助けしてもらい、なんとか教えることができました。

「すごい。」

「よくできたね。」

と励ましの声をかけると喜んでもらえました。

また、難しさとして、問題を解いていく過程で集中できない時があり、対応に迫られました。ボランティアは、顔見知りの同級生に教えているのではなく、初対面の四年生に教えているので、どんな風に声かけしていくのが良いのかすぐに言葉がみつかりませんでした。『工夫しながらアドバイスする』の『工夫』が難しかったです。

終了後に、指導した四年生から、お礼の言葉をかけてもらい嬉しい気持ちになりました。そして自信にもつながったように思います。

最初は、一人で心細かったものの、休憩時間に、僕の好きなキャラクターのイラストを描いていると、四年生の児童がそのイラストを好んでくれてプレゼントし、喜んでもらえたり、さらにはボランティアの高校生に

「上手だね。」

とほめられて、イラストを描くことで班員の方々とコミュニケーションをとることができて自分

もリラックスできたのも思い出の一つです。

参加したからこそいただけた、『トコロんのびのび塾』とかいてある特別な缶バッジや飲み物が嬉しかったです。大切にしたいと思います。

来年も機会があれば『トコロんのびのび塾』に参加したいと思います。今度は、四年生以外の学年とも、班で同じになるもう一人のボランティアルアップした説明やトラブルへの対応もできたら、そしてイラスト以外でも喜ばせられるようにしたいと思っています。

いいやつになるため

所沢中学校二年 平間 誉人

ぼくは、小学校から中学校とバスケットをしています。ミニバスの頃は「遅刻厳禁」「あいさつ返事は大きく」など礼儀を大切に少し厳しいチームに所属していました。そのチームのモットーとして「いいやつになってほしい」というものがありました。でもその「いいやつ」というものの意味を小学生の頃はあまり分からなかった深いものが、今になり分かってきたものがあります。

まず一つ目は、しっかりあいさつや返事ができ

仲間のことを思いやれるような人ということですね。特に自分がやっていたバスケットは仲間とのコミュニケーション、友情関係が大切になってくるスポーツなので相手を思いやることの大切さというのを学び実感しました。それから、自分の経験上、「あいさつ返事ができているチーム」、「リユック、荷物の並び方がきれいなチーム」はすごく上手いチームが多いと思います。そしてなにより応援の声が大きいチームは、ふんいきでも実力でも圧倒されることが多いなと思いました。それはチームのために仲間のために全力を出せる子たちだからなんじゃないかなと思いました。

二つ目の意味は、何にでも全力で取り組むことができ、楽しむことができるということです。スポーツというものには「キツい」というものがつきものだけれども、その中で全力でやることの美しさというものが分かってきました。夏の醍醐味、甲子園を見て感動する人がたくさんいます。それはそれぞれの学校で仲間と共にがんばっている姿を見て人々の心を動かされるからだと思います。なにかに熱中している人はカッコいいと思います。そういうことができる人が社会に出て、大人になってもみんなから好まれるような「いいやつ」になれるんだと思います。

三つ目は、常に感謝の気持ちを忘れないという

意味もこめられているんじゃないかなと思います。友達への感謝、家族への感謝はもちろん、体育館への感謝、環境への感謝なども大事な日に日に思います。今こんなに恵まれた環境で生活できていることを感謝して生きようと思います。

自分が入っている部活やクラブチームなどでOBが来ることがあります。それは上手くしてくれた先生、監督などへの感謝の気持ちで来てくれているんだと思います。すごく上手いOBの人たちは優しくてすごく憧れます。「いいやつ」は憧れられるんだなとも思いました。この「いいやつ」になってほしい」という言葉は簡単そうで難しいような言葉です。でも日々、人や物への感謝を忘れないでいれば「いいやつ」に近づけるんじゃないかなと思います。親などがよく言う「大人になって分かるもの」というものを、まだ子供だし社会に出ていないから分からないけれど、礼儀は大切にあいさつはしっかりして「いいやつ」の本当の意味をこれからも探していこうと思いました。



私は絵を描くのが好き

南陵中学校二年 中村 瑠夏

私は、絵を描くのが好き。自由に自分を表現できるから。白いキャンバスに、自分の思い描いた世界が一面に広がる。それが面白かった。でも、私はあの言葉を時々思いだしてしまう。

「何、それ。変な色。」

この言葉は、私が小学校一年生の頃に言われたことだ。図工の時間『思い出』というテーマで絵を描き、それぞれの絵を班で鑑賞し合うという時間。私は正直なところ、胸がおどつていた。なぜなら自分の中で、一番うまく描けた傑作だったからだ。題名は『川遊び』。朝から夕方まで友達とたっぷり遊んだ日のことを描きたかった私は、オレンジと青の二色のグラデーションを空の色として使ったのだった。この工夫を、班のみんなはどう受け取ってくれるだろうと胸がドキドキしていた時、

「何、それ。変な色。」

同じ班員の男子がそう口にした。自分ではよく描けたと思っていたこの空も、他の人から見たら変なのかと、私は少し動揺した。

「空は青いんだから、オレンジはいらないだろ。こんな空、見たことないよ。」

そう言われてからというもの、私は色をぬることに若干の抵抗を覚えた。「変」といわれるのが怖くて、心配だったから。

しかし、とある夏休み。小学校に入学してから初めての長休みの日、私はその時一番仲がよかった友達と一緒に、夏休みの宿題をやっていた。私は図画工作。友達は算数。それぞれ集中して取り組んでいた際、私はどうも途中で手がすすまなくなつてしまつていた。

「ねえ。これつてどうしても色をぬらなきゃいけないのかな。」

私は友達に思わず尋ねた。友達は不思議そうな顔をしてこちらの様子を伺う。

「どうしたの？急に。」

私は洗いざらい友だちに、手がすすまない理由を話した。すると友達は優しく微笑み言った。

「別にいいじゃん。好きな色で描いてもさ。それに見て！あの空。どう見てもきれいな紫と桃色じゃない？」

友達が窓のほうをゆびさす。つられ、私も窓の外を見てみるとそこには、まるで水彩絵の具でぬつたかのような、鮮やかで淡いライラックの花のような色の空が広がっていた。

「…きれい。」

思わず口からこぼれた。

「なんか、空つて不思議。空の色を見るだけで、気分が上がったり下がったりするから。」

「確かに！」

と二人で笑い合う。

私はこの日から、あの色をぬることを恐れていた自分におさらばできた。もちろん、友達のおかげで。自分の好きな場所、好きな色で描く絵は、最高に生き生きしている気がする。新型コロナウイルスで、なかなか外に出ることができなかった時も、私は絵を描くことで、元氣やモチベーションを得ていた。中学校に入学して二年目になった今は、美術部の一員として日々力をつけ、ハッチング技術などの美術の授業で学んだものを活かしながら製作にはげんでいる。その中で、部員たちと意見交換をしたり、アドバイスやよい点などを皆と互いに共有したりして、自分の色使いをたくさんの人からほめてもらえるようにまで成長できた。（ちなみに私の色使いを指摘してきた男の子は今では私たち美術部の仲間として、全力で製作にはげみ、時々自分の絵をほめてくれたりしています。）

最初はコンプレックスだった色使いも、誰かに背中をおしてもらふことで、後に自分の自信になることを知った私の将来の夢は、人を笑顔にできるような絵を描く人になること。これまでにいろ

心のコミュニケーション

南陵中学校二年 増賀 未桜

ろな人に私の絵を見てもらって、私が今絵を描くうえで大切にしていることは何かを考えた時、気持ちよさをこめると見た人が笑顔になってくれることと思った。

これから先、私は夢に向かって全力で前にすすむつもりだ。だから時には、人のぬくもりが恋しくなったり、辛いことがあって悩んだりすることだろう。でもそんな時は、背中をおしてくれた友達や認めてくれた仲間のことを思いだして、少しずつ進んでいこうと思う。今日できなかったことは明日。明日できなかったことは何度でもチャレンジできる大人に、私はなりたい。

私は、絵を描くのが好き。誰になんといわれようと、これが私の個性だって胸張って言うてやる。



「あいさつ」と「感謝」を言葉にして伝えることは、「心のコミュニケーション」だと思う。

まだ小さい頃、私はあいさつが苦手だった。友達には気兼ねなくあいさつできていたが、ばったり会った家の近所に住んでいる人には、

「おはようございます。」

の「お」の字も出てこないほどだった。

小学生になった私は、毎朝話しかけてくださる校長先生に出会った。校長先生はいつもみんなに

「先にあいさつ、はなまる！」

と笑顔でおっしゃっていた。周りのみんなは初日から元気にあいさつしていたが、私にできたことは、聞こえるかどうかの小さな声で

「お、おはようございます。」

と言うことだけだった。それでも校長先生はそれを聴き取り

「はい、おはようございます！先にあいさつはなまる！」

と、笑顔で返してくださいました。それから、校長先生につられるように少しずつあいさつができるようになった。私があいさつするたびに、先生は笑って

「おはよう！はなまる！」

とおっしゃる。それが嬉しく、校長先生に会うたびにあいさつをするようになっていた。今思えば、私があいさつするまで待っていたにいたのだと思う。そのことで自信がついた私は、他の先生や今までできもしないと思っていた家の近所に住む人にもあいさつができるようになっていた。あいさつをすると、みんなが笑顔になる。それが嬉しく、私はますますあいさつをするようになった。また、あいさつができるようになってから変わったことがもう一つある。それは「感謝」を言葉にできるようになったことだ。何かをして頂いたら「ありがとうございます。」自分が嬉しいと感じたら「ありがとうございます。」感謝が言葉にできるようになったことで、周りの人や初対面の人も仲良くなれることが増えたように感じている。

そこから中学校に入学し、半数以上が知らない仲間という状況でもいろいろな人と仲良くなることができたのは、あいさつと感謝の土台があったからだろう。中学校でも、あいさつをすると笑顔で返してくれることは変わらなかった。先生方からも「あいさつは先手必勝」「『感謝』を忘れないこと」を教わってきた。それでも、自分の中で言葉で伝えることをより一層強く意識し始めたのは、一年生の後期からだだった。委員会の仕事で

他クラスの人や、今まであまり話してこなかった仲間と話す機会が増えたからだ。あいさつを交わし、お互いに感謝を伝え続けることで少しずつ信頼関係を築くことができる。それを肌で感じる機会も増えた。また、言葉で伝えることを意識し始めるきっかけになった出来事がもう一つある。それは、二学期最後の授業後の休み時間でのことだ。私が廊下に出ようと教卓の前を通ったとき、何人かが先生に

「二学期ありがとうございます。」

と伝えているのが聞こえた。こんなふうに誰から言われるわけでもなく自分から感謝を伝えることができるのはすごいと思った。この二つの出来事があったから、私は前より言葉にすることを意識し積極的に感謝やあいさつを伝えることができるようになった。

あいさつをすることで、人との繋がりを持つことができる。感謝を伝えることで互いを認め合い、よりコミュニケーションをとることで信頼関係を築くことができるようになる。これは、相手をいつでも思いやることができる「心のコミュニケーション」だ。これがあるからこそ、私はいろいろな人と繋がることのできたのだ。「先に」「忘れず」行うことを心に留めて私は今日も「心のコミュニケーション」をとる。

私に毎朝笑顔を向けてくださっていた校長先生、いつも大切なことに気づかせ、支えてくださる先生方、お世話になっていく多くの方々、側にいてくれる友達、ありがとうございます。

国境なき救済支援

小手指中学校二年 今井 律花

みなさん、東日本大震災が起こったその後のことについて知っていますか。

二〇一一年三月十一日、十四時四十六分、最大震度七、マグニチュード九の観測史上最大の地震、東日本大震災が起こりました。その時、私は石巻に住んでおり押し寄せる津波から逃げた一人です。生後七カ月で当時の記憶はないけれど毎年石巻を訪れる中で心が揺さぶられる景色を、話を沢山見て、聴いてきました。

その経験の中でもっとも伝えたいことは私たち家族と台湾の絆についてです。東日本大震災後、台湾より義援金二百億円以上、四百トンを超える物資が届きました。このことは被災者だけではなく、誰しも知っていることです。ですが震災直後、台湾の人たちが被災地に直接赴き、数多くの震災支援を行ったことはあまり知られていないのです。被災地の人たちが、忘れられない位、感謝し

た逸話があります。台湾の「慈濟」という団体は、気温十度を下回る中、震災五日後に炊き出しを行いました。水、電気ライフラインが途絶えている中のこの行動は命をつなぐことにもなったと思います。この炊き出しは現地で知らない人はいないが、後にメディアで報道されていないと知って驚きました。また、団体の救済支援はこれだけではなく、被災者に現金を直接配布をしました。現地の役所と協力し、配布場所に来ることができない人には直接訪問し、誰一人残さない救済支援を行ってきました。実際、身一つで津波から逃げ、被災した母や祖母やまわりの被災者は、直接配布された現金が、先が見えない避難生活の中、安心を与えてくれ感謝しかないと話していました。

その他にも台湾は震災後、東北への最初の旅客機を送り、観光経済を支えてくれました。また、病院や災害公営住宅など復興建設にも支援してくれ、この支援は二〇一八年まで続きました。長く強く支援を続けた台湾、なぜ九州ほどの小さな国なのに多額義援金を集められたのか、それは、チャリティー番組で日本への支援を訴え続けたこと、小中高等学校では子どもたちがお小遣いを集めて募金したり、個人から個人への支援があり、記録に残らない義援金がたくさん届けられたのです。

そんな日本を大きく支えてくれた国、台湾に父の仕事の関係で、震災後、五年ほど住むことになりました。そこで見たものふれたものは心温まるものばかりでした。例えば、日本台湾交流協会には台湾人から頑張れを意味する、「加油」の文字が壁一面にたくさんありました。また、毎年三月十一日には追悼式が行われています。道を歩いていて、日本人だと分かれると「日本大丈夫？がんばって」と、また日本統治時代の日本教育を受けた世代の方からは母よりきれいな日本語で、「心配しています、応援しています」と声をかけてくれました。台湾の人々は、日本の災害に同情し、物・心両面で援助してくれたのかと、私たち家族はその真心や思いやり、感謝を折にふれ話をします。「どんなときも人を思いやる優しさを忘れてはいけない」と。

震災の経験を得て、伝えたいことがあります。今、南海トラフ地震の懸念が高まり、いつ大地震、大津波が起きてもおかしくありません。どうかその時は、一刻も早くその場を離れ、高台や頑丈な建物へ逃げて下さい。自分の命を一番に守って下さい。私たちは東日本大震災がもたらした学びを忘れてはいけません。そして、震災はどの国で起こるか分かりません。有事の時は、人と人の助け合いが大きな力になり、平和につながると思

っています。

私たち家族は台湾のことを第二の故郷だと思っています。台湾の人々は「日本有事、就事台湾有事」と言ってくれます。日本が困っているときは台湾も困っている、つまり、日本が困っているときに自分ごとのように考えてくれます。

東日本大震災から約十三年が経ちました。今年、一月一日石川県能登半島を震源とする地震が発生しましたが、この時も台湾は早く約六千万円の寄付をし、現在に至るまでに二十五億円以上の義援金が集まり、変わらない支援が続いています。台湾が日本にしてくれたことのように、台湾人が私たち家族にしてくれたことのように、災害のときもどんなときも寄りそっていく心をもちたいと私は思います。それが日本と台湾だけではなく世界中に広がることを心から願っています。



中学生 銀賞

サマースクールボランティアの経験を力に

安松中学校一年 小柳 結絆

私は去年、サマースクールという五年生、六年生を対象に夏休みの一週間、親元から離れて、栃木県塩谷町にある廃校になった『くまの木』という自然あふれる場所で過ごしました。ここでの生活は私にとって初めての経験で、とても良い刺激をもらい、大勢の仲間との大切な思い出になり、来年は中学生リーダーとして参加したいと心に強く思いました。

そして今年、応ぼ者多数の中当選し、リーダーとして様々な場面で気付かされることがありました。

自然の中で過ごす時間割りのない学校で、初めて出会った大勢の仲間と協力し、絆を深めることができました。私は、人に話しかけることが苦手で緊張して上手く話せません。去年の私に中学生リーダーに優しく声をかけてもらい、とても嬉しかった記憶があります。この経験を生かし今年も中学生リーダーとして小学生に話しかけようと

思いましたが、なかなか勇気が出ず、話しかけることができませんでした。リーダーをするための事前準備で研修を四日間受けた時に学んだことを思い出し、その日私ができていなかった姿を見ていた大学生リーダーからもアドバイスを受け、その二つのことを意識して次の日勇気を出して話しかけると成功し、とても自信が付きました。その日をきっかけに話しかけることが恥ずかしくなくなり、あの頃の私と同じように困っていた子の心の支えになれていたらいなと思えました。リーダーからのアドバイスは小学生との話し方のことで、はいかいいえで答えられない話題を振ったり、家族の話題を話したりすると話が弾むよと教えてもらい、実践することができました。

サマースクールのプログラムで川遊びがあり、去年参加して初めて高い所から飛びこんだりして、とても楽しかったです。大人リーダーを始め、たくさんリーダーに見守られながら怪我もなく、安全に過ごすことができました。今年は中学生リーダーとして見守る側になり、命を守る責任感や大変さを身を持って実感しました。

他には、山登り、はんごう、キャンプファイヤー、アイロンビーズ、バレーボール、ダンス、暗やみでのピアノコンサート、肝試し、ロッククライミング、リレー、ドッジボール大会、バスケ、

鬼ごっこ等があり、どれも楽しいプログラムでした。はんごうでは約百人分を十五人で作りました。小さなはんごうで、役割分担をしても手がちぎれてしまいそうならいお米を炊くのが大変でした。私ははんごうにお米をよそったり、洗ったり、休んでいる子に扇子であおいだりしていました。いつも炊飯器で炊いていたのでとても大変でしたが、お米の炊き方が分かったので良かったです。他にも山登りでヒルに噛まれてしまった子を助けたり、川を渡っている子を見守ったりリーダーの仕事を全うしました。

私はサマースクールを通して様々な経験をしました。今まで当たり前のようにしてもらっていたことを自分がやるようになってから自信がつき、これからの学校生活などに活かせられるといいなと思いました。また来年も、中二リーダーとして参加したいと思いました。

進化し続けるAIと人間

北野中学校一年 前川 琴

現在、AIはさまざまな場所で使われています。そして、AIを知らない人はほとんどいないのではないのでしょうか。それほど、人々には大切な存在になっています。ただ、私は人間とAIそれぞ

れの良さの違いや、AIの提案以外にも選択肢がある」と理解することが重要だと考えます。

AIとは、機械に人間と同じような知能を与える技術のことをいいます。ネットによると、知能を持つだけでなく自ら学習し、分析や提案などができる所もAIの大きな特徴だとありました。確かに、ほん訳をしたり、お掃除ロボットが障害物をよけて掃除ができたり、豊富な情報とそれを活かした対応力があります。私は、そのようなAIだからこそできるたくさんのことを、この先どんな伸ばしていつてほしいです。例えば、医りょうでAIの情報力を活用したり、人材不足解消などのために配せんロボットを使用することです。ですが、AIに任せていることでも、自分がしてみると喜びになることもあります。私は、学校のそうじの時間が好きです。なぜなら、大きいほりや汚れがとれると気持ちがすっきりして、嬉しいからです。お掃除ロボットに掃除してもらうだけでなく、たまに自分で掃除をすると、ほこりがたまっている所がきれいになったりして、達成感や喜びを得られると思います。これは、AIがしている時には感じられないことで、自分がするからこそ感じられることです。そして、AIではなく、人間がするからこそいいものがまだたくさんあります。私はその中で、スポーツが挙げられる

と思います。AIはスポーツでも、試合を分析して情報を出すといったことに使われています。バスケットでは、シュートの成功率やシュートを打った場所などを確認できます。さらに、そのような情報があることで、細かい戦略を立てられます。ただ、プレーをするのはAIではなく人間です。例えば、去年行われた男子バスケットワールドカップのフィンランド戦、日本は十八点もあつた点差をひっくり返し、勝利を収めました。このように、逆転したときはとても嬉しいです。そして、こういった展開は人間にしかつくることができません。流れが悪かったり、プレーが上手くいかなかったとしても一生懸命にプレーし続けている姿を見ると、応援したくなります。このように、AIにはできない、人間がやるからこそその面白さや素晴らしさがあります。そのため、AIの良い所、人間の良い所の違いを理解し、AIを活用していくことが大切だと思っています。

もう一つ、言いたいことがあります。それは、AIの答えが全てではない、ということです。ここで間違えないでほしいのが、AIの計算の答えが違ふ、ということではなく、正解が一つではない場合は、AIが全てではないと言いたいのです。例えば、ショッピングにおすすめのお店や、旅行に行くならどこがいいか、などが当てはまると思

います。旅行に行く時にAIに提案してもらって、いいなと思った所に行くのは良いと思います。ただ、カタログなどの情報を見て行くのも良いと思います。そうすれば、いろいろな情報を見るので、その場所の知識をつけた状態で行くことができます。では、AIが提案した所ではいけないのか、といったら、そうではありません。一番大切なのは、自分が行きたい所に行くことです。AIがいいといっているから行く、という理由ではなく、ここは、こういうのが楽しそうで行きたい、と思つて行くことが大切だと思います。このように、AIが全部正しいのではなく、他の選択肢もあるので、自分が納得できるものを選ぶことが重要です。

AIは、人々が便利に暮らせるように進化を続けています。その進化し続けるAIを、どんな所でどのように使うのか、人間も判断し続けることが大切だと思っています。



本当の平和の実現のために

所沢中学校二年 小笠原 鈴花

今年広島県では七十九回目の原爆の日を迎えた。一つの原子爆弾によつて無差別に多くの命が奪われた一九四五年八月六日。今、世界にも同じような目にあっている人がたくさんいる。だからこそ本当の平和とはなにか自分なりの答えを見つけるために私は広島県にある平和記念資料館に足を運んだ。

本当に日本で起きてしまったことなのか。そう感じてしまうぐらい目の前に並んだ展示品は胸が痛むものばかりだった。焼けたお弁当や水筒、破れた衣類などの被爆によつて犠牲になった人々の遺品や、日記、写真さらに原子爆弾が投下された八時十五分で針が止まった時計これら全ての展示品の数々が戦争の怖さ、原子爆弾の恐ろしさを物語っていた。近年の日本は外国との交流が盛んだ。その影響もあるから前回、資料館に足を運んだ時よりも外国人の姿が多く見られた。やはり、展示品から胸に突きささるような思いを感じとった人、展示品を見て涙する外国人の姿を見て、もつと多くの人に戦争の恐ろしさを、世界中の人に核兵器に怖さを知ってもらいたいと感じた。私がそのようなことを思ったのにはわけが

ある。「二度と戦争を起こさない」これを日本だけでなく世界共通認識としたいからだ。日本が戦争をしないと決めただけでは世界の平和を実現することができない。実際に今も、二年続くロシアのウクライナ侵攻によつた爆弾の投下によつて、小さな子供から大人までたくさんの人が亡くなっている。さらにイスラエルでも爆弾を使った争いが起きている。これ以外でも世界中では争いがたくさん起きているだろう。それらを無くしていくためには、日本で起きた原子爆弾の投下によつて人々の命が奪われてしまったこと、被害の大きさなどを一度目にしてみるのが大切だと感じる。一人でも多くの人が戦争の苦しさや怖さ、恐ろしさ、悲惨さを感じてくれることがこれからの未来を築いていく私たちにとつて大切なことなのだろう。そしてその怖さを自分の胸にしまつておかずに身近な人からでいいから自分の知ったことを広めることも「二度と戦争を起こさない」これを世界共通認識にするための第一歩だと考える。そうすることは平和な世界にするための一歩でもあると思う。

平和記念館に行く前に、平和について考えてみたときは戦争をしないこと、とぼんやりとしたものだった。だが、行つてからもつと平和というたつた二文字について深く考えることができた。確

かに戦争をしないことは大切だ。だが本当の平和とはそれだけではない。人々が何かにおびえることなく、世の中が穏やかになること、これこそが本当の平和なのだと思う。被爆者の高齢化が進む今、私たちが昔の日本から目を背けずに目を向け、平和について考える。そして広島から、日本から世界の戦争について、原子爆弾について、平和について発信し、本当の平和の実現がしたい。

平和の祭典

中央中学校二年 二上 勇斗

二〇十四年七月二十六日から十六日間、第三十三回オリンピック競技大会がフランス・パリにて開催された。三十二の競技、三百二十九種目が行われ、テレビ観戦をするのが楽しみだった。文化、国籍などを超え、世界各国の代表選手が熱戦を繰り広げている姿に感動し、画面越しに家族全員で応援し、盛り上がった。

「オリンピックは平和の祭典だよ。」

と、お母さんが言った。どういう意味なのかわからなかったが気になったので、自分で調べてみた。オリンピックの歴史はとても古い。オリンピック開催のきっかけは、紀元前九世紀ごろまでさかのぼる。もともとは争いが絶えなかった古代ギリ

シヤで、休戦を促すために四年に一度、球技大会を開いたのが始まりと言われている。つまり、人間は、はるか昔から争いごとをし、傷つけあっていたことになる。このころは古代オリンピックと呼ばれるが、数々の戦乱に巻き込まれ幕を閉じる。国と国との争いもあれば、同じ国内での争いもある。宗教、民族、文化、政権への不満、領土や資源の奪い合いなど、様々な事情が原因となって、世界中で戦争や紛争を引き起こしている。

最近では、ロシアとウクライナが戦争をしている。街を破壊され、多くの一般人が犠牲となる状況が、二年以上前から今もまだ続いている。そこに住む人はある日突然当たり前の日常がなくなり、家を無くし、仕事を無くし、食糧も満足に得られず、明日をどう生きたらいいの不安な日々を送る難民となっている。多くの人がいつ終わるのかわからない戦争に苦しんでいるのだ。

僕自身、自分の国に起きていないと他人事のようには思ってしまうが、過去には日本も戦争で原爆が投下され、多くの犠牲者を出した。当時の悲惨な様子は、写真や映像でしかみたことはないが、目をそむけたくなるような残酷なものだった。人間がつくった兵器で人間を傷つける。戦争は恐ろしいと感じ、悲しみしか生まないものだと思った。今年には終戦から七十九年になる。毎年八月にな

ると、戦争に関するニュースや番組が放送され、テレビで目にする機会が増える。戦争という過去の過ちを二度と繰り返さないためにも、風化させてはいけないうと番組内で言っていた。僕たちのような世代は過去に起きた事実を知り、それを受け止めて今を生きる必要があると思う。これから先、どんなことがあっても、二度と戦争をしてはいけない。なぜなら悲劇しか生まないからである。

古代オリンピックから千五百年後、オリンピックは近代オリンピックとして復活する。世界平和を究極の目的としたスポーツの祭典となり、近年はスポーツと文化に環境が加わって、世界中の人々が地球環境について考える機会になっている。

四年後のオリンピックはロサンゼルスで開催されることが決まっている。それまでに今も起きている戦争や紛争が終わり、オリンピックが世界中の人々にとって「平和の祭典」になることを心から願うばかりだ。



オリンピック柔道から学ぶ

南陵中学校二年 小堤 瑛太

今年フランスのパリでオリンピックが開催された。僕は柔道部なので、やはり柔道という種目に注目していた。自分は身体も小さく試合でも強くないので、少しでもヒントになるものがあればと思い観戦していた。勝った国も負けた国もどちらも本当に素晴らしかった。その中でも記憶に残る試合が二つあった。

一つ目は金メダルをとった四十八キロ級の角田夏実選手の決勝である。見事な巴投げをして技ありを取り有勢勝ちをした直後のこと。笑ったり喜んだりせずに冷静に試合を終えて引き上げる。畳に向かつて一礼。その後ろで日本の選手団の関係者も同じタイミングでお辞儀した。この丁寧な深い礼が気持ち良いと世界中で絶賛された。

二つ目は五十二キロ級阿部詩選手が戦った相手、ウズベキスタンのケルディヨロワ選手のことだ。メダル候補の阿部選手に谷落として一本勝ち。強い選手に勝てた時は飛び上がる程嬉しかっただろう。しかし、落ち着いた態度で動じることなく礼をして畳を降りた。この後ケルディヨロワ選手はこの級で優勝し金メダルを獲得した。インタビューでは「阿部は強いからこそ阿部に勝っても

喜びたくなかった」と述べた。

これらの試合は二人とも柔道の技術もすごいが相手へのリスペクトも素晴らしいと感じた。柔道にも本当に金メダルにふさわしいと感じた。柔道は「礼に始まり礼に終わる」といわれているが相手を尊重する礼儀作法が見事だった。普段から厳しい稽古をして技を磨くとともに自分とも向き合い心を鍛えているんだろうと感動した。僕は何かの技の学びができればと思い観戦していたが、何よりも選手たちの鍛えられた精神力を感じた。

また、柔道の教えで思い出したことがある。柔道の創始者嘉納の「人に勝つよりまず自分に勝つ」という有名な言葉だ。僕は友人と意見がぶつかり言い合いをしてしまったことがある。そういう時は、絶対に自分は悪くない、と思う反面そんな自分も未熟だなと思う。また学校の勉強や部活をつい楽したみいと思うってしまうこともあるし、だるい時はサボりたいと思うこともある。でも師範のこの言葉を思うと、嫌なことも辛いこともそこで乗り越えていった時に成長することができ、新しい自分に出会えるのだと改めて思った。

オリンピックの選手たちを観て、柔道では様々な技を使って試合に勝つだけでなく、相手に敬意を払う礼の精神が欠かせないことがよく分かった。これは普段の生活にも深く関わっている。相

手に自分の意見や気持ちを伝えたい時は、まず自分が礼儀をもって正しい姿勢で接しなければ相手に気持ちが伝わらないからだ。これからは、選手の姿勢を見習ってこのことを忘れないようにしたい。そして、柔道の師範の言う通り、イラツとすることがあったならしっかりと自分の思いと向き合うことが大切だし、そして自分の中の誘惑にも負けない強い精神を持てるように努力したいと思った。

今回テレビで観戦していて、フランスをはじめ世界中に柔道というスポーツが愛され親しまれていることが、とてもよくわかった。僕は柔道初心者なので、上から柔道を語るのはおかしいが、沢山のことを学ばせてくれるこのスポーツはすごい。だから、部活の先生方に柔道を教えてもらえること、また僕を応援してくれる家族にはいつも感謝しなければいけないと思った。そして、一緒に練習してくれる友人や先輩、後輩との時間はとても貴重であり大切にしたいと思った。

今年のオリンピックは柔道にかぎらず他の種目でも沢山のドラマがあり、感動の連続でとても見応えがあった。さらに世界のトップアスリートたちの戦いを観たことで、普段の自分の生活や自分自信を振り返るよいきっかけとなった。二学期も新たな気持ちでがんばりたい。

かけがえのない命

南陵中学校二年 古谷野 莉子

「おじいちゃんは末期癌で先が長くはない。」今年の二月に父からそう告げられた時、私は信じられない気持ちでいっぱいでした。いつも通りに生活しているし、病人にはとうてい見えませんでした。したが、転移があり手術できない状態でした。本人の意思で癌の治療はせずに、痛みを取るだけの緩和ケアを受ける方針で、動けるうちは在宅医療を選択し、家で過ごすことになりました。

私の家は二世帯住宅で一階に祖父母、二階に両親と私がそれぞれ別世帯で暮らしています。中学に上がるまではほぼ毎日のように一階に行き、たくさん時間を一緒に過ごしてきました。祖父はどんな時とても優しく、公園に連れて行ってくれたり、工作や絵を描いたり、たくさん遊んでくれて、私はとても可愛がってもらっていました。しかし中学生になってからは、学校や部活と塾で忙しく、祖父母の顔を見る時間が減ってしまいました。でも私の中で祖父母はいつも居てくれるという認識があり、あまり気にしていませんでした。その後、祖父は体調を崩して入院しました。お見舞いに行くと、祖父は寝ていました。腕には点滴が刺さり、頬はこけ、腕や脚は細く、顔つきも

身体も変わって病気なんだと改めて感じさせられました。とても痛々しくて涙が出そうになりました。父が声を掛けると祖父は目を覚ました。しつかり受け答えもできるし、普通に会話もできました。早く家に帰りたいと言って泣いていましたが、私はかける言葉が見つかりませんでした。祖父のいのちの時間が刻々と終わりに近づいている中で、どんな言葉をかけていいのかわからず、

「また来るね。」

と帰り際に言うのが精一杯で病院を後にしました。

数日して祖父は退院し、在宅医療で医師と看護師から診察を受ける日々になりました。できることは自分でやるという強い意志を持って、身体が痛くても歩いたり、栄養を摂ろうと頑張って食事をしていました。薬のせいで寝ている時間が長くなり、起きていても辛そうな姿を目の当たりにすると悲しくなってしまうようで、祖父に顔を見せに行くことから少し逃げてしまっていた自分がありました。

六月下旬になり、とうとう自力で歩くことができなくなった祖父は緩和ケア病棟に入院し、三週間ほどで天国に旅立ちました。数日前にお見舞いに行った際には話すこともできたので突然でし

た。残念ながら最後の時に家族は間に合わず、立ち会うことができませんでした。お葬式では家族や孫、ひ孫と写っている写真を準備して送ってあげました。もう会えないと思うと淋しくて悲しかったけれど、今までありがとうという感謝の気持ちでいっぱいでした。

今は写真の祖父にしか会えません。

「おじいちゃんはあるが好きだったよね。」

「みんなで旅行した時にこんなことがあったよね。」

と、思い出話が出てくるけれど、祖父は何か伝えなかったことや、やり残したことはなかったのかと考えることがあります。私自信、本当は、「生まれてからずっと一緒にいてくれてありがとう。」

そう伝えなかったからです。でもその言葉を言うのは最期のような気がしてずっと言えませんでした。それを母に話したら、

「おじいちゃんは今亡くなっても、みんなの心の中で生き続けているから、気持ちは伝わっているよ。」

と言われました。祖父は優しい祖父のまま、ずっと私や家族のことを見守っていてくれていると信じることにしました。

毎朝学校に行く時に「いってらっしゃい」と庭

から言ってくれる祖父の声が私には聞こえる気がしています。

私はこれからも一日一日を大切にして、祖父に感謝しながら精一杯生きていこうと思います。



言葉の力

南陵中学校二年 菅原 愛菜

皆さんにとって言葉とはどんなものですか。私は、人と人をつなぐ小さな橋だと思います。言葉には良さがたくさんあります。私は言葉によって何度も支えられたことがあります。特に、母に言われた言葉にはいつも助けられています。

私は学校でバレーボール部に所属しています。去年の冬に一年生大会がありました。私たちにとっては初めての試合ですごく楽しみにしていました。三チームが総当たりをして順位をつける試合で、私たちは前日の練習で、

「絶対勝とうね。みんなでがんばろう。」と気合いが入っていました。

そんな中、迎えた当日、私はキャプテンと伝えられて、より緊張が込み上げてきました。笑顔で楽しくプレーをすることを目標にして試合に挑みました。一試合目の結果は二対一で負け。緊張で相手のリズムに流されてしまったからだと思います。空気が重くて、あわてて何度も声をかけただけ、二試合目の結果はストレート負け。みんなは泣いていたり、暗いムードだったけど、ここで自分が泣いてはいけなと思って笑顔をつくっていました。母は小学三年生から実業団までバ

レーをしてきたので、家に帰って何を言われるか少し不安でした。でも家に帰ると、

「お疲れさま。よく頑張った。」

と言ってくれました。その一言でがまんしていた涙が止まらなくなりました。他にも、バレーが上手くならなくて伸び悩んでいた時に、

「実力が足りないからしょうがない。」

と私が言うと、母は、

「実力って言葉は、できないことを練習し続けて、実った力だから、最初からあきらめている人が簡単に実力って言葉を使っただけじゃないと思うよ。」

と言われました。最初はそんなこと言わなくてもと思ったけど後から、確かに私より上手い人は見えない所で努力しているのかもしれない、だから私も頑張ってみようと思えました。

私はこの時のことを思い出すと、言葉って魔法の力があるんだなと思います。例えば、「頑張つて」や「ありがとう」など前向きな言葉を言われたら、勇気をあたえたり、言った側も言われた側も笑顔になれると思います。

ですが、世界は良い言葉だけではありません。今はいじめやインターネットで誹謗中傷の書き込みが多くなっています。特に今年は四年に一度開催されるオリンピックが行われたことで選手

への誹謗中傷が広がっていて問題になっています。日本も誹謗中傷の書き込みが後を絶ちません。試合に勝ったら祝福して、負けたら誹謗中傷する世の中はまちがっていると思います。選手はこのために努力してきて、一番悔しいはずなのに、その努力を汚すように傷つく言葉を言うのではなく、選手に対して、「感動をくれてありがとう」など相手を思った優しい言葉が広がっていくといいなと思います。

言葉は使い方方をまちがえると相手を傷つけてしまう凶器になってしまいます。言葉の使い方方に注意したり、相手の気持ちを考える、自分が言われたらどう思うか一度立ち止まって考えることも大切だと思います。だれもが安心安全で楽しく暮らせる世界になっていけるように、私たちのような年代のうちから言葉の大切さや使い方を正しく理解して、発信していけるようにしたいです。

